2025 年度

SGT　活動レポート

おくすり110番

9 月 6 日（土）に「おくすり 110 番 ～薬学生と一緒に学ぼう～」が開催されました。名城大学の野田幸裕教授と薬学生をお招きし、講義と実験に 19 人の生徒と教員 1 名が参加しました。

視聴覚室で行われた野田先生による講義では、患者とのコミュニケーションを大切にし、臨床に関わりながら薬を処方することが大切であるとのお話をうかがいました。そのため、これまでは看護師が担当していたワクチン接種を含む薬の投与についても薬剤師が行うようになってきているとのことでした。また医療費が高騰している昨今、在宅で薬をもらいながら治療をする患者も増えているので薬剤師が患者のお宅を訪問し薬を届けることが増えているそうです。それ故、医師、薬剤師、看護士とチームを組み地域の医療にあたる臨床薬剤師となることが社会のニーズとして求められているとのことでした。また癌や糖尿病など特定の疾患を専門的に担当する薬剤師も出てきており、従来の薬剤師よりも特定の疾患の治療については詳しい知識を持つ薬剤師が増えてきているとのことでした。

化学実験室で行われた薬学生による体験実験では、胃で溶けずに腸で溶ける薬のしくみや飲み物と薬の相互作用としてグレープフルーツジュースと高血圧の薬を一緒に飲むと、薬が効き過ぎてしまうこと、シロップの「くすり」と「お茶」を一緒に飲むとどうなるのかといった実験や抗がん剤の調製に関する実験を行いました。抗がん剤の調製の実験では、ファシールという抗がん剤を調製する際に曝露しないための道具を使い、安全に薬を調製する方法を学びました。

多くの生徒が初めての体験をし、薬について学ぶことができました。

第 1 部は、座学講座です。名城大学薬学部教授の野田先生の講義を聞いています。

9 歳～16 歳の間にいじめや虐待を受けると 19 歳以上における大うつ病性障害やストレス関連精神疾患の発祥リスクが増加するそうです。

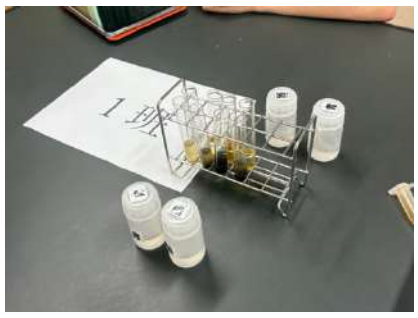
基礎研究と臨床研究を大切にし、チームワークとチームプレイで薬剤師の専門性を発揮出来るようにすることが必要な時代になってきています。

これからの薬剤師は、薬物療法のプロフェッショナルであるとともに薬学的な視点を持つ研究者でなくてはならないそうです。

第 2 部は、薬学部生のアドバイスを受けながらの実験です。これが今回の実験道具です。

胃で溶けず腸で溶ける薬の実験です。

シロップの薬とお茶を一緒に飲むとどうなってしまうのかを確かめる実験です。



没食子酸と鉄イオンが結合し錯体を形成し、黒く変色しました。

ファシールシステムを使った抗がん剤の調整手続きについて体験します。

薬学生のアドバイスを受けながら、抗がん剤の調製の模擬体験を行っています。

薬学生の手元をよく見つめながらファシールの使い方を学んでいきます。

本校の卒業生である加納先輩が丁寧に指導してくれます。参加された同級生の教員も一緒に実験に参加しています。